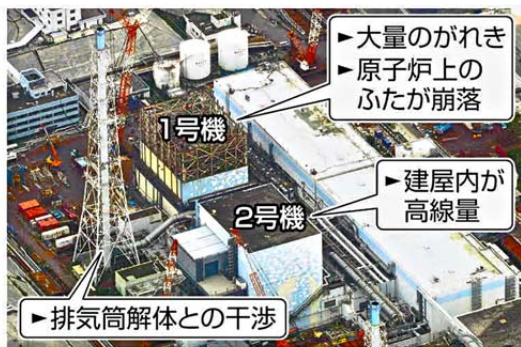


後退する福島第一原発の核燃料取り出し



| | |
|--------------------|---------------------------|
| プール内の使用済み核燃料取り出し開始 | |
| 1,2号機 | 2020年度 今回改定 → 23年度 |
| 3号機 | 18年度中頃 |
| 溶け落ちた核燃料(デブリ)の取り出し | |
| 初号機選定と方法確定 | 18年度前半 → 19年度 |
| 取り出し開始 | 21年内 |

The Truth is in the Actuality

3・11以降、各種世論調査では、原発依存からの脱却を求める声が常に過半数を占めている。

にもかかわらず、首相は公示後の第一声を福島で上げながら「原発推進」を語らなかった。

10月10日衆議院選挙公示の当日、福島地裁は、原発事故でふるさとを追われた福島県住民らの訴えを認め、事故の責任が国と東電にあることを認め、国と東電に賠償を命じる判決を言い渡した。

だが、原告の居住地の放射線量を事故前の水準に戻す「原状回復」を認められなかった。

原状回復が必要なのは放射線だけではない。原発事故で仕事を失った人もいれば、家族を亡くした人、家族がバラバラになった人もいる。避難しても地元にとどまっても、みんなそれまでの安心して暮らせる生活や人生を奪われ、苦しんでいる。元の生活を返せというのは切実な願いだ。

福島県からの避難者は、いまだ五万人以上に上る。

九月末、国と東電は廃炉への工程表を改定し、福島第一原発1、2号機のプール内に保管されている使用済み燃料の取り出しを三年間、延期した。

メルトダウン(炉心溶融)で溶け落ちた燃料デブリ(固まり)の取り出しに至っては、その方法の決定すら一年先延ばしになった。

事故処理の費用は総額二十二兆円に上ると見積もられている。事故処理が遅ればさらに増大するし、そのツケは国民に回される。

真実は飾った言葉ではなく現実の中にある

原発の安全確保や、万一の事故の備えに国はどのように関与していくか、代替エネルギーの普及策、立地地域の振興策、核のごみをどうするのか。フクシマの現状を直視して、そこにある事実から具体的な議論と対策を行うべきだ。選挙は終わった。国民の声は原発ゼロと再稼働反対が多数派であり、国会内の多数派が国民の多数派ではない。選挙のための飾った言葉ではなく、現実の中にある真実に向き合わなければならない。今フクシマに正しく向き合わないと、私たちの未来は、危険にさらされる。

僕が訴えたいこと

福島原発被害東京賠償訴訟 15才の原告最終陳述

2017年10月25日東京地方裁判所

僕は、福島県いわき市で生まれ、両親と、5歳離れた弟と共に生活していました。

当時は、春になればテレビで何度も紹介されるくらい桜並木の有名な「夜の森公園」でお花見をし、夏は潮干狩りに行き、秋はきのこ狩りをして、冬は雪だるまを作る。公園や学校の帰りの通学路でツクシをたくさん採って帰って、お母さんに作ってもらったツクシの佃煮が好きでした。家も庭も広く、ブルーベリーやしいたけ、プチトマト等は庭で収穫できました。学校では友達と昆虫を見つけたり、泥団子を作ったりして遊んでいました。

しかし、2011年3月11日を境に、このような生活は全てなくなってしまいました。夜の森公園は今も帰宅困難区域だし、放射能だらけの泥で泥団子は作れません。



しかし、何よりも一番つらかったのが、転校先でのいじめです。

図工の時間に作った作品に悪口を書かれていたり、菌扱いされたりしてきました。そのようなことが続き、できることなら死んでしまいたいと思うようになりました。小学校の3年生か4年生のときには、七夕の短冊に「天国に行きたい」と書いたこともありました。



たぶん、避難者についてよく知らされていない人の目には、福島から来た避難者は家が壊れていないのだから何も被害はなかったのに多額の賠償金だけもらって、しかも東京の避難所にただで住んでいる「ずるい人たち」とうつるのでしょ。本当は、東京電力や国が、放射能汚染の恐ろしさや僕たち家族のような区域外避難者にはほとんど賠償金を払っていないことなど、正しい情報をみんなに伝えてくれているならば、こんな勘違いは起きなかったと思います。実際、中学生になって今までの学校と全く関係のない学校に進学して、ずっと自分が避難者ということを隠していますが、いじめは起きていません。

原発によって儲かったのは大人、原発を作ったのも大人だし、原発事故を起こした原因も大人。しかし、学校でいじめられるのも、「将来病気になるかも…」と不安に思いながら生きるのも、家族が離れ離れになるのも僕たち子どもです。

原発事故が起きてしまった今、本当は誰も安全なんて言えないはずだし、実際、誰も僕に「君は病気にならないよ」とは言ってくれません。なのに、東京電力や国の大人たちは「あなたの地域はもう大丈夫ですので安心してください」と言って、危険があるところへ戻らせています。でも、僕たちが大人になって病気になるかもしれない頃には、僕たちを無理やり危険な場所へ戻らせた大人たちは死んでしまっていて、もういない。そんなのひどくないですか？



僕たちはこれから、大人の出した汚染物質とともに、生きることになるのです。その責任を取らずに先に死んでしまうなんて、あまりに無責任だと僕は思います。せめて生きていくうちに、自分たちが行ったこと、自分たちが儲けて汚したものの責任をきちんと取って行って欲しいです。

そして今は、「(放射能) 汚染した場所に戻りたくない」と思っている僕たちを無理やり(放射能) 汚染している場所に戻らせることは絶対にやめて欲しいです。

僕、父、母と弟はもちろん、避難者はみんな原発事故が起きてから、生活、人生も変えさせられてしまいました。誰も望んだことではありません。避難者は、みんな同じです。東京電力と国には責任をとってもらいたいと思います。裁判所は、僕たち子どもたち、そして、全ての避難者の声に耳を傾けてください。